

現代資本主義の消費論

--- 佐伯啓思氏と見田宗介氏の所説をめぐって ---

The Theories of Consumption in Modern Capitalism

篠原三郎*
Saburo SHINOHARA

Abstract

This paper aims to analyze the relation between modern capitalism and consumption. Modern capitalism under over capital has brought us to over consumption. Based on this point, I criticize the work by Keishi Saeki and one by Munesuke Mita.

目次

まえがき

1. 欲望と資本主義
2. 現代資本主義の「危機」
3. 資本主義市場経済
4. 現代資本主義の歴史的位罫
5. 情報化・消費化社会の「転回」

あとがき

* Former professor, Nihon Fuhushi University

まえがき

「生産力過剰。これが現代資本制経済の根本問題」⁽¹⁾ とみる高橋洋児氏は、この過剰の処理を果たしてくれた一つが、20世紀の二つの世界大戦であったと論じている。このような資本としての生産力の過剰下にある、いかにも物騒な現代社会の特徴を過剰な消費社会としてとらえ、戦争こそ取り上げてはいないが、興味深く分析しているのがジャン・ボードリアールの『消費社会の神話と構造』⁽²⁾、これを読みながら、その果てに見田宗介氏の見つめている「現代の情報化／消費化社会の、光の巨大と闇の巨大」⁽³⁾を感じ、恐ろしくもなっていた。ことに、その前に、たまたま、キャサリン・A・マッキノンの『フェミニズムと表現の自由』⁽⁴⁾に接していて、これほどジェンダー問題が問われているにもかかわらず、現代社会では、性差別的なポルノグラフィーがなんでこんなに目につき、また、それがポルノ、ないし、セックス産業として繁盛しているのか、その経済的理由が知りたく思っていた矢先のボードリアール、そこにこんな文章があった。

「消費対象のパノプリ [セット] のなかには、何よりも美しく貴重で素晴らしいモノ --- あらゆるモノの要約的表現である自動車よりはるかに多くの共示を含んだモノがある。肉体だ。長い間続いたピューリタニズムの時代ののちに、肉体と性の解放を標榜して肉体の再発見が行われ、今や肉体は広告、モード、大衆文化などいたるところに氾濫している（とくに女性の肉体がそうなのだが、その理由についてはあとで検討する必要がある）。肉体を取り巻く衛生観念や栄養や医療の崇拜、若さ、エレガンス、男らしさ、女らしさなどの強迫観念、美容や痩せるための節食療法およびそれらの生贄の儀式を思わせるやり方、そして肉体にまつわる快樂の神話 --- これらはすべて今日では肉体が救済の対象となったことを示している。救済という道徳的イデオロギー的機能において、肉体は文字通り靈魂に取ってかわったのである。」⁽⁵⁾

資本過剰下の経済システムとしては、戦争と同じように、過剰の解消のやり方として、ポルノ、ないし、セックス産業への投資は、企業にとりもっとも理にかなった方法なのであろうが、現代社会の虚しさを感じられてならなかった。しかし、これを機縁に、現代社会を消費ないし、それに関わるような視点から、改めて見てみたくなった。辺りを見渡したら、わたくしの不勉強はあるものの、そのような類書があまりに多いのに驚いた。

本稿は、それらのなかから、新書版でもあり、入手しやすく、読んだ人の多くがそう認めてきたように、優れた著書でもある、佐伯啓思氏の『「欲望」と資本主義』⁽⁶⁾と、それに関わって先に述べた見田宗介氏の『現代社会の理論』⁽⁷⁾の二著を取り上げて現代社会論の方法を考えていこうとするものである。最初にお断わりしておきたいことだが、すぐまえにも書いたように、両著とも、文字通りの名著、啓発されることの多いが、本稿では、それらには触れず、わたくしの疑問とすることのみ取り上げている。また、どなたも既読しておられるということを前提に展開しているので、説明が不十分であったり、片寄った印象をもたれることもあるかもしれない。それらに加えて、個性的な著者たちの文体にも興味がわき、その氣息のようなものも伝えたく、その

ため引用が長文になることも、あらかじめお断わりしておきたい。

1. 欲望と資本主義

「人間の欲望の拡張という観点から資本主義を理解してみたい。だから、ここでいう「資本主義」とは、人間の活動のあくまで一部、重要ではあるがひとつの局面なのである。それはせいぜい「資本主義的な活動」というべき⁽⁸⁾とわれる佐伯氏は、現代の資本主義を、資本主義の歴史をふりかえり、つぎのように位置づけている。

「かつてのヨーロッパにおいては、資本主義の欲望は、文明の相違やヨーロッパ内での階級に依存していた。今世紀のアメリカの大衆社会では、それは大衆の相互依存性という構造に依存していた。そして現代の情報社会では、資本主義はメディアに依存する。メディアが欲望を操作するといういい方は必ずしも適当ではない。むしろ人々がメディアによって欲望を刺激されることを待っている、といった方が適切だろう。

ここにいわゆる「情報資本主義」といわれるものの意味がある。産業革命以来今日まで、資本主義は「産業」（とりわけ工業）と結びついてきた。産業主義と資本主義が結合したわけだ。これを「産業資本主義」といってもさしつかえない。

ただしここでいうのは、重化学工業中心の資本主義という意味ではなく、あくまで、消費者の欲望のフロンティアが産業化を進める中で拡大し、工業的生産物を通してかたちをあたえられていったという意味である。画一的で質のよいものを大量生産することが、大衆社会の人々の欲望のフロンティアをひらいていったのである。

しかし、このような意味でのフロンティアがほぼいきづまった今、消費者の欲望をかるうじて操作するものは、メディア・情報装置なのである。⁽⁹⁾

こうした「情報資本主義」ともいえる現代の資本主義では、佐伯氏によれば、「人々はメディア・情報からあるメッセージを受け取るというよりも、メディア・情報そのものを消費している。モノを消費して欲望をみたすのではなく、情報を消費し、いつのまにか欲望を植え付けられる⁽¹⁰⁾、「情報を消費する人は、情報によって自分自身を無意識のうちに操作している⁽¹¹⁾」というのである。しかもかかる現代こそ、「物質的な豊かさという意味⁽¹²⁾で、「かつてなくゆたかな社会に住んでいる⁽¹³⁾」状況であると、その病理が語られていくとき、ある種の恐ろしささえ感じられてくる。

このような「現代の資本主義の「危機」⁽¹⁴⁾」が生みだす状況をいかに受けとめるべきか、また、そこから解放されなければならない可能性をも、佐伯氏は、以下のように伝えてくれる。わたくしも、その可能性に期待したい。

「これは、一面では、人間の未知なるものに対する想像力の危機だともいえる。人間は「新しいもの」を手元にたぐりよせる強力なメカニズムを失いつつあるからだ。だが、逆にいえば、その想像力を産業技術が独占していた「近代」を脱して、それをもう一度、文化や知識の領域に取

り戻す可能性も開かれてきたのである。欲望が常に技術、とりわけ産業技術によって開拓され、「新しいもの」が産業技術によって提供されてきた、「産業資本主義」と訣別することができるのである。」⁽¹⁵⁾

「モノは本来、技術だけではなく文化の産物でもある。経済活動自体が、本来は広い意味で文化という土壌と不可分なのである。今世紀の産業主義は、それを技術の次元に還元し、文化から切り離そうとした。いま限界にきているのはそうした今世紀の産業主義である。だが、その限界地点で、ようやく、欲望を産業技術のフロンティアの奴隷にすることから解放されようとしているのではないだろうか。欲望を文化的なイマジネーションの世界へ取り戻すことができるようになってきたのではないだろうかと思う。わたしはといえば、やはりこの可能性にかけてみたいのである。」⁽¹⁶⁾

2. 現代資本主義の「危機」

しかしながら、これまでのような「資本主義」の論理を前提にしては、「危機」にある「現代の資本主義」の状況から果たして、「ようやく、欲望を産業技術のフロンティアの奴隷にすることから解放されようとしているのではないだろうか。欲望を文化的なイマジネーションの世界へ取り戻すことができるようになってきたのではないだろうか」といった「可能性」をつかむことができるものなのだろうか。

そのような疑問がでてくるのは、「欲望を産業技術のフロンティアの奴隷」にしてきたものがなんなのか、だれなのか、が、佐伯氏では十分明らかにされていないからなのである。もちろん、「欲望が常に技術、とりわけ産業技術によって開拓され、「新しいもの」が産業技術によって提供されてきた、「産業資本主義」と訣別することができるのである」などと、縷々のべておられるのだが、そもそもの「産業資本主義」を担ってきたものがなんなのか、だれなのか、が語られていないように思える。

そのためか、「可能性」を実現していくための手掛かりでもいい、だれがなにをなすべきかのプログラムがみえてこないのである。現代の「資本主義」の「可能性」をただ聴くことで終わっていく気分になるのである。新たな利潤を求め、エンドレスな活動を貪欲なまで過去において展開してきた、遅い「資本主義」の印象がまた、佐伯氏の筆致が急にトーン・ダウンしていくようでもあった。未来を見通すことはだれにも難しいことではあるが、それ以上に、資本主義はそんなに脆弱なものなのだろうか。

佐伯氏は、先にも紹介しておいたように、「人間の欲望の拡張という観点から資本主義を理解」せんとするため、「資本主義」を「資本主義的な活動」といった定義をされていた。又、他のところでは、「資本主義」とは、とりあえず、企業が、たえず、新たな利潤を求めて、蓄積した資本を積極的に投資し、しかもそのことが経済社会全体の物質的な富の拡大に決定的な重要性をもっているような活動」⁽¹⁷⁾とも述べているが、企業の「活動」というところに力点がおかれている。

それはそれで、氏の研究課題を考察していこうとするかぎり、問題のないことだが、その考察に関わってこざるをえない諸事象については、それぞれそれ相応の事実認識が求められるものである。たとえば、企業をめぐる認識である。企業は利潤の追求を目的とするものであるから、企業の「活動」は利潤追求のための「資本主義的な活動」なのである。したがって、新たなフロンティアの追求といっても、それ自体としてあるのではなく、企業の利潤目的のかぎりのことである。

それゆえ、「産業資本主義」がいまその「限界地点」にきているからといっても、そのような企業の目的をめぐる現実的な考察を軽視しては、そこからの「訣別」や可能性を探ることが難しい。ということは、佐伯氏の展開では、そこに登場してくる企業の、とりわけ、消費者の欲望との関係における企業をめぐる認識が不十分ということにならざるをえないのである。あらためて、その点をめぐって、氏の考え方を探してみたい。

佐伯氏は、「欲望と資本主義の連動」⁽¹⁸⁾ ということ、以下のようにのべている。

「欲望を……（中略）……フロンティアの拡張運動と理解してみよう。フロンティアのむこうにはまだ見ぬもの、見るのが禁じられているもの、神秘的なものが広がっている。……（中略）……科学も、芸術も、技術も、もともとはこうしたフロンティアのむこうに対する欲望に発するものだといってよかろう。……（中略）……「資本主義」もまた、ある独特のしかたで、このフロンティアを拡張しようとする運動なのである。」⁽¹⁹⁾

「ある独特のしかたでというのは、欲望の対象を商品にするということだ。欲望のフロンティアの拡張は、それ自体が商品のかたちをとる。フロンティアをおし開くことは、この「商品」をめぐる、一方で消費者の欲望を開拓し、他方で企業に新たな利潤機会を提供する。いや、たえまなく欲望のフロンティアが開かれていくことによって、消費者と企業というふたつのカテゴリーが分節化されてくるのである。」⁽²⁰⁾

「こうして、欲望のフロンティアの拡張はまた市場の拡張を意味することになる。消費者は、たえず新奇なものを求め、また社会の階段を上昇することを夢見て欲望を膨らませる。企業はそこに利潤機会を求め、たえまなく新たなものを生みだそうとする。その結果、市場は無限の拡張という自動運動の中にほうり込まれてしまうのだ。このような、市場を舞台とする、欲望のフロンティアの拡張の自動運動こそが、ここでいう「資本主義」である。消費者と企業はともにその自動運動の歯車なのである。」⁽²¹⁾

つまり、繰り返すことになるが、佐伯氏では、「フロンティアをおし開くことは、この「商品」をめぐる、一方で消費者の欲望を開拓し、他方で企業に新たな利潤機会を提供する。いや、たえまなく欲望のフロンティアが開かれていくことによって、消費者と企業というふたつのカテゴリーが分節化され」、消費者と企業の関係は、「欲望のフロンティアの拡張の自動運動」の「歯車」と把握されており、そして、それはそれとして当たっているものであるけれど、両者のあいだの社会力学的分析をめぐる問題関心がみられないのである。むしろ、企業と消費者は「共犯関係」⁽²²⁾と強調されつつ、「欲望のフロンティアの拡張」が語られ、企業と消費者のあり方が掴まれてい

るように受けとれる。そのため、「歯車」のリアリティーが伝わってこないのである。この社会力学的考察を加えていくためには、企業とはなにか、また、資本主義の経済システムとはどのようなものか、その構造と運動の具体的分析が必要となってくるのではあるまいか。

ここまで、わたくしが問題としてきた佐伯氏の著書を取り上げては、石塚良次氏がつぎのように評されているのも、私見と共通した懸念から生まれてきたことなのではなかろうか。

「佐伯さんの本のモチーフのひとつは、資本主義というものを欲望のフロンティアの無限の拡張としてとらえるという新しい資本主義観を出すということだと思います。おそらくこれには、ウェーバー・大塚久雄的な、つまり戦後の日本の社会科学で主流をなしていた考え方に対するアンチ・テーゼという側面がある。また一方でアジア NIES をはじめとした資本主義の新しい発展というものを背後に置いた議論でもあると思います。

確かにウェーバー・大塚的なプロテスタンティズムの労働倫理が資本主義を作り出したという議論はあまりにも一面的に過ぎますし、また実証的にも問題を抱えていることは確かです。しかしそれに対するアンチ・テーゼがああいう形での消費資本主義論ということになりますと、逆の意味でこれもまた一面的に過ぎるのではないかと思うんです。」⁽²³⁾

「資本主義を捉える場合に、欲望とか消費とかが重要であることはもちろんですが、それとともに労働だとか生産だとか、全体としての再生産構造への視点を欠落させてはいけないのではないか、ということです。」⁽²⁴⁾

この、石塚氏のいうところの「全体としての再生産構造への視点」こそ必要なのである。ところで、佐伯氏は、「資本主義」と、「(「市場のメカニズムにしたがってモノやサービスが交換される世界」⁽²⁵⁾と解されている)「市場経済」とは重なり合うものの「区別しておいた方がよい」⁽²⁶⁾ことを強調されているが、「全体としての再生産構造の視点」から「資本主義」を捉えていこうとするさい、それと「市場経済」との関連のあり方が重要となってくるのである。ちなみに、論者によって資本主義や市場経済の理解が異なることがあるものの、また両者は、概念として区別されるべきものではあるが、市場経済を欠く資本主義など考えられない。むしろ、問題は、資本主義市場経済なるものの歴史的な特徴、その変化に注目すべきことなのである。

このような視点から「資本主義」を見直そうとするとき、佐伯氏の「資本主義」観とは異なる、しかし、氏からは旧態のままの認識と指摘されるかもしれない資本主義論をしていかねばならないし、したがって、また、氏とは違った市場経済認識をのべていかざるをえないだろう。

3. 資本主義市場経済

まず、なにより、資本主義とは、それが胃袋からくるものであれ、想像からくるものであれ、人間が求める欲望のすべてが商品として生産されている経済システムである。人間の労働力さえも商品として売買されている。資本主義的企業は、市場から労働力と生産手段を購入し、市場に向けて生産している。どんな商品をいかに生産するかは、個別の企業にとり自由なので、商品が

買い手たちにとって、供給過剰になったり、逆に供給不足となったり、市場経済は、変動に絶えまない。しかし、過剰となれば、価格が下がるので、企業は、生産を縮小し、より多くの利益が得られる他商品の生産を始めようとする。不足の場合は、反対の動きをするであろう。また、全面的な過剰生産ともなれば、諸企業の過剰な資本は、恐慌と不況の過程を経過しながら、整理され、経済は、またあらたなる好況に向けて景気循環を再開するという、いわゆる自動調節機能がこの資本主義には、傾向として作用している。ここでは、個別企業にとって、自己の商品がいくらで売れ、いくら儲かるかは、事後的にしか分からない。企業内の経営活動は意識的、自覚的に行なわれているが、企業の一步外の市場経済の世界での動きは無政府的である。今もってそうであるように、確実な予想などできない。個別企業が市場を十全に支配することが不可能な経済なのである。もし出来るとすれば、形容矛盾のようなものである。

ところが、そのような性格をもつ資本主義も、19世紀末になると、株式会社制度が利用され、普及していくとともに、資本が容易に集めやすく資本規模も大きくなり、とりわけ生産手段のうちの固定資本部分が巨大化してくると、企業資本の移動も、いままでに比べると、商品の市場価格の変動に対して、自由に対応することができにくくなる。価格が低下したからといっても、企業は、巨額の未償却固定資本部分を犠牲にしてまで、いままでの生産をストップし、他商品の生産に向かうことはできにくい。資本の移動が、以前のように、自由に行なえなくなるのである。巨大企業は、資本の損失を意味する資本過剰と常に隣り合わせになる。ということは、資本主義の自動調節機能が不完全になってきていることをあらわしている。こういう資本主義の事態は、最大利潤を追求してきた個別企業間同士の自由な経済競争が生み出してきた結果なのである。その上で、この危機的事態を克服するために形成されてくるのが、巨大企業間の組織的連携である。株式会社制度をとっているために、それも容易となっている。独占の成立に他ならない。資本過剰の損失を回避するために、それ以前とは質的に異なった厳しい、しかも、さまざまな経営管理が開発されるようになり、また、それに対応する労働管理や生産管理、人事管理、労使関係などの諸技術・諸制度が多種多様に展開されていくであろうし、また、他方で、巧みなマーケティングの諸活動によって消費者に新たなる欲望が作りだされ、それを満たすための新たなる商品群が新たなるフロンティアとして市場に並びたつ。それを商品として実現していくために、さまざまな消費者向けの新しい信用創造も工夫され、これまでになく促進されるようになる。その結果、将来の収入を見越して商品を購入するようになる。こういうことが可能となるのも、現代の資本主義である。消費者の欲望を支配し、その商品の価格さえ管理せんとする独占資本主義の段階に入っているのである。同時に、いわゆる大量生産、大量販売、大量消費、大量廃棄もはじまっている。

このように市場を部分的に支配でき、消費者の欲望の開発や独占価格の設定が可能となることの歴史的意義は重大である。価格は販売されなければ分からない時代には、生産コストの低下が個別企業にとって経営活動の中心的目標となつてこざるをえなかったが、価格設定のようなことが可能となつてくれば、企業活動の範囲も、その性格も、経営戦略も自ずから異なってくる。も

もちろん、消費者の欲望や価格が管理できるようになったからとはいえ、市場経済を前提にしている以上、無制限にできるものではない。大企業同士の激しい競争が世界的にも一方で展開されていくわけで、市場の支配は、あくまでも部分的であって、全面的ではない。しかし、部分的であれ、市場支配が可能となることによって、企業の外部が、その限りで意識される経営環境として位置づけられるようになる。無政府的な市場に支配され、商品の確かな販売結果が事後的にしかわからない、そして、最終的には、「見えざる手」に身を委かすしかなかった企業の世界では、計画通り実現できるような現代的な経営計画など立てようにもなかったのである。

さて、市場経済の本来のありかたが自由競争を原理とするものであれば、市場経済の反対にたつ原理のあり方は、無政府的ではない、意識的な計画経済であろう。市場を支配するというパラドキシカルな関係をもつものではあるが、部分的にであれ、計画経済を市場経済に取り入れるということは、ある種の混合経済であり、市場経済の変容といわざるをえない。市場経済の政治化、あるいは、柔構造化とでもいうべきことであろう。

ともあれ、そのような計画を可能とする条件が揃いはじめたということが、わたくしたちが今、目にする大量生産体制を確立しえたことになるとともに、それがまた、皮肉にも資本主義社会自体の土台を揺るがすような事態を形成してしまったのである。こんにち周知の、地球環境破壊問題等の深刻な社会的状況を生みだす原因ともなっていたのである。外へ、内へと欲望のフロンティアのエンドレスな拡張を求めてきた結果、「モノの豊かさ」をいわゆる先進国の人間の多くに供給できるようになった資本制的経済条件が、同時に、一般にいわれているように、社会の存続の危機をもたらしているのである。しかし、環境問題については、佐伯氏の著書では取り上げておられないので、この問題をこれ以上云々していくことは無理な注文となってしまうが、資本主義市場経済の歴史的变化という、わたくしの関心の範囲で言及しておきたかったのである。

すなわち、資本主義が社会体制として存続していくための地球環境自体が危機的な存在となるのであれば、こんにちの事態は、市場経済を含む社会全体が広く深く政治化してこざるをえなくなっていることを表現しているのではなからうか。

4. 現代資本主義の歴史的位 置

あらためて、繰り返すことであるが、巨大企業が部分的にであれ、市場経済を支配することが可能となり、その強力によって資本の理論を押し通そうとすれば、大量生産、大量消費、大量廃棄、それによる地球環境破壊といった社会的諸問題を生み出すとってきたが、実は、そのことは、同時に、独占資本主義時代に特徴的な資本過剰といった事態によるプレッシャーが、経営活動やマーケティング活動を一層熾烈なものにしていく一方、それ自体人間破壊を意味していくような、恒常的な過剰労働、あるいは、慢性的な失業問題を引き起こす傾向を生み出していくことでもあるのである。労働力を商品として売らねば生きていけぬ資本主義では、失業は生きていけぬこと、自殺・死を意味していくものであれば、大量の失業は社会不安を呼び覚まし、社会の存

立さえ危ぶむことにもなる。そんな、企業とそこで働く労働者であり、同時に消費者であるものと厳しくせめぎあうなかで欲望のありようも問題となっていく現代である。ところが、「消費者と企業はともにその自動運動の歯車」、あるいは、「共犯関係」と捉えている佐伯氏の認識からは、両者のせめぎあう、また、せめぎあわざるをえない社会力学的な問題への考察が抜け落ちてしまうことになる。

先に、市場経済の政治化ということが資本としての企業の側から引き起こされることを指摘してきたが、それに促され、おのれの生存の不安と危機に追い込まれる、消費者でもある労働者のあり方も、次第に政治化せざるをえなくなっていく。しかし、政治化といっても、当然、両者の政治化の方向は相対立するものである。いわば、階級対立的である。資本の側からの市場経済の政治化は、資本制の生産を基礎にした市場経済の論理を貫徹する方向で展開しようとするし、労働の側からの政治化は、市場経済の体制から排除される危機感を背景に起きてくるものであれば、これまでの市場経済そのものを従来のままに放置しておくことが許されなくなる。市場経済に対してそれまで控え目にあった国家も、労働者階級に対するそれなりの雇用、賃金、社会保障への政策に取り組まざるをえなくなる一方、景気対策として、さまざまな財政投融资、軍事予算の増大を積極的にすすめるようとする。この状況にさきの地球環境問題の深刻さが加われれば、従来の市場経済認識にとどまりえなくなるであろう。そうしなければ、時代錯誤となる。市場経済のそのような政治化への流れは、市場経済外の社会的諸領域をも含めて現代の諸問題を歴史的に考えていく機会に通じていく可能性を生成していることである。それはまた、これまでの社会思想のあり方や、学問研究の方法と体系の見直しをも俎上にのぼらせ、問題化せざるをえなくさせる。このような歴史の流れは、地球環境破壊問題をはじめ、資本主義がそれまで累積してきた社会的な諸矛盾を様々な形をとって現出させることにもなる。フェミニズム運動、人種差別反対運動、障害者問題、高齢者問題、消費者運動、教育荒廃問題、過労死問題、社会不安等、限りない。このことは、市場経済としての資本主義のありかたに対して、資本の論理から離れた位置にあるものからの意義申し立てをしうる余地が、対立する側より出てきたことを意味している。これらにおいて重要なことは、問題の発見・認識・提起の切っ掛けが市場経済システムに疑義をもちはじめたものからのものであるということである。この疑義が、対象を市場経済に限定し、前提としてきたそれまでの経済学では考察できなかった、たとえば、環境破壊にかかわれば、社会的損失、社会的費用、環境権、等々、といった諸概念の新発見に結びつく切っ掛けともなっていくし、フェミニズム運動についていえば、家父長制概念、ジェンダー概念、あるいは、家事労働概念などがあげられるのである。あるいは、また、欲望と「資本主義」の関係から、「消費資本主義の病理」⁽²⁷⁾を理論的に、歴史的に解明され、「資本主義」のこれからのあり方の可能性を提示されている当面の佐伯氏の著書自体も、やはり、現代資本主義の市場経済の流れがあってはじめてありえたことと考えるのである。

このような市場経済の政治化の進展という事態、独占資本主義段階以前では、理論的にも、歴史的にも考えられなかったことであろう。資本主義の経済システムのそのような歴史の変容が社

会的に展開している時代こそ現代であることを強調したいのである。

以上、現代資本主義の歴史的特徴を明らかにすべく迂遠な説明を長々してきたが、このシステムの未来を探そうとするとき、利潤追求を第一義的にして成り立っている資本主義のあり方をまず変えていこうとしないかぎり、「欲望を産業技術のフロンティアの奴隷にすることから解放され」えないし、「欲望を文化的なイマジネーションの世界へ取り戻すこと」もできないのではなからうか、ということである。佐伯氏がいわれるように、現代の資本主義では、「技術のフロンティアと欲望のフロンティアが乖離しはじめた」⁽²⁸⁾としても、資本主義の論理を押さえこもうとしないかぎり、企業は、また、「資本主義」は、そこへ新たな利潤機会を求めて動きだすだけではないだろうか。「欲望を産業技術のフロンティアの奴隷にすることから解放」されたとしても、新しい「資本主義」の新しい奴隷に変わるだけなのではなからうか。奴隷であることに変わりない。

5. 情報化・消費化社会の「転回」

実は、現代資本主義の他の側面を軽視とはいわないが、理論的に十分論究せずに、その未来をとらえようとするのは、佐伯氏のそれにかぎらぬ。見田宗介氏の現代社会論にも共通したものを感ずる。見田氏は、現代資本主義にみられる「消費社会」を、まず、以下のように規定しているので、みてみよう。

「消費社会」は、資本制システムの論理自体の、消費の領域への貫徹であり一般化である。

古典的な資本制システムの矛盾 --- 需要の有限性と供給能力の無限拡大する運動との間の矛盾、これが「恐慌」という形で顕在化することによって、「資本主義の矛盾」の典型的な証明として語られてきた --- この基本矛盾を、資本のシステム自体による需要の無限の自己創出という仕方

で解決し、のりこえてしまう形式が、情報化/消費化社会 にほかならなかった。

このようにして 情報化/消費化社会 は、初めて自己を完成した資本制システムである。自己の運動の自由を保障する空間としての市場自体を、自ら創出する資本主義。人間たちの欲望をつくりだす資本のシステム。資本制システムはここに初めて、人間たちの自然の必要と共同体たちの文化の欲望の有限性という、システムにとって外部の前提への依存から脱出し、前提を自ら創出する「自己準拠的」なシステム、自立するシステムとして完成する。

情報化/消費化社会 は、誤解されているように、「純粋な資本主義」からの逸脱とか変容ではなく、情報化/消費化社会こそが初めて純粋な資本主義である。」⁽²⁹⁾

現代資本主義を「純粋な資本主義」としてこのように位置づけ、見田氏は、その未来をつぎのよう

にみる。

「現代の、情報化/消費化社会という巨大な歴史の実験が、大衆的な規模で実証していることは、人間はどんなものでも欲望することができるし、人間が見出す幸福の形態には限りがないということである。」⁽³⁰⁾

「そうであるならばわれわれは、この情報化／消費化社会の依拠する根拠、人間の欲望と感受の能力の可塑性と自由ということ自体を、根拠とし基軸として方向を転回すること、自然収奪的でなく、他者収奪的でないような仕方の生存の美学の方向に、欲望と感受の能力を転回することもまた可能なはずである。」⁽³¹⁾

「消費の社会」という思想のシステムに正しさの根拠があるのは、それが生産の自己目的化という狂気から人を自由にする限りにおいてであった。消費のコンセプトを徹底してゆけば、それはわれわれを、あらゆる種類の効用と手段主義的な思考の彼方にあるものに向かって解き放ってくれる。」⁽³²⁾

「情報化社会」というシステムと思想の正しさの根拠があるのは、それがわれわれを、マテリアルな消費に依存する価値と幸福のイメージから自由にしてくれる限りにおいてであった。情報のコンセプトを徹底してゆけば、それはわれわれを、あらゆる種類の物質主義的な幸福の彼方にあるものに向かって解き放ってくれる。」⁽³³⁾

しかし、われわれは、いまだに消費に対しても、情報に対しても、これまでのようなイメージに拘束され、解放されていない、と見田氏は述べ、「われわれはなお 情報化／消費化社会の、過渡的な、矛盾にみちた入口に立っている」⁽³⁴⁾と結んでいく。

見田氏の未来への可能性認識には共感をもつものであるが、「われわれ」が、いまあるような消費や、消費に対するいまもつような「イメージ」に、なぜ、拘束されざるをえないのか、解放されないのか、といった現実の事態に対する問題関心の薄さに、なぜか、疑問を感じざるを得ないのである。したがって、高橋洋児氏が指摘される、つぎのような意見がでてくるのも、同じように、もっともと思われるのである。

「見田さんのご指摘自体はごもっともだと思うんですけども、生産と消費との逆転ですとか、あるいは消費というものが商品を買うという一面的な形のものになってきたといったようなことを論じる際には、何故そうなったのかということを経済発展段階論としてまずは考えておかないといけない。現象の表面だけ見てこうなりました、ああなりましたというのでは、問題の根本はどこにあって、その根本的な問題点を打開していくためにはどういう展望がありうるのかという筋道が出てこないと思うんですよ。残念ながら見田さんには資本主義の発展段階論はちょっと見あたらないと思うんですが。」⁽³⁵⁾

先にみてきたような「純粋な資本主義」なるものを含意している現代資本主義が、なぜ、どのように形成されるようになったかの分析が、見田氏から読みとれないのである。高橋氏は、そのことを指摘されているのだと思う。

すでに前節で述べてきたような、現代社会を形成している資本の過剰、そこから起因してくる社会のあらゆる側面での過剰、こういうなかでの消費化、情報化であり、欲望の拡張でもある。その側面からの社会的歴史的考察を欠けば、見田氏が提示されている、せつかくの魅力的な見方でもある、「自然収奪的でなく、他者収奪的でないような仕方の生存の美学の方向に、欲望と感受の能力を転回することもまた可能」とする見方が、かつてコミュニズムが多くのもにそうみ

えていたような、それに似たユートピアにみえてきてしようがないのである。

なにより、これまでの、「労働の抽象化された自由の形式のみを前提」⁽³⁶⁾としていた資本主義論に対し、さらにそれに加えて「欲望の抽象化された自由の形式」⁽³⁷⁾をも前提とする「純粋な資本主義」論が提起できること自体が、資本過剰下に形成されている現代資本主義市場経済という歴史的現実を前提としてはじめてありえたことなのである。その前提を切り離して描かれた「純粋な資本主義」、リアルに響いてこないのである。

ともあれ、見田氏であれ、佐伯氏であれ、消費のありようを問題とし、強調していく資本主義論、かつての、いわゆる生産力主義に対するリアクションではないが、消費主義ともいべきものにたっているように思えてならない。前者では、生産力の社会性といったことに関心がなく、いわゆる生産関係、階級関係をもっぱら中心に問題を展開しようとしていたが、後者では、逆に向っているようだ。ただ、資本が過剰となっている現代、もう生産力とはいえず、消費のあり方の問題に楽観的にも悲観的にも変わってきている。消費資本主義という言葉さえ流布されるようになってきている時代である。生産関係、階級関係のあり方が複雑となり、捉えにくくなっている現代資本主義市場経済の現実の反映でもあろう。しかし、分析がリアルであるためには、やはり、現実がそうである以上、それなりの他の諸側面への考察が欠かせない。

問題は、こんにちの市場経済システムを現実的にいかに変容していくか、超えていくかである。しかも、それが可能となる社会的条件もできあがっているのである。しかも、また、他方で、現状を変容し、超えていかなば、現代社会の存立も危うくなってもいるのである。

現代資本主義の市場経済は、しかし、巨大企業の強力なイニシアティブにしたがって展開されている。企業の利益増進に連なる使用価値の商品のみが供給されている。買い手である他人のための使用価値であるよりは、売り手である企業利益のために登場してくる市場の商品である。マーケティングなどによって強圧的につくりあげられた欲望を満たすため、消費者は、消費行動に走らされている。その結果、佐伯氏が指摘していたように、人間は、「未知なるものに対する想像力の危機」に晒されてしまう。人間は、資本主義という経済システムに管理されることになる。しかし、同時に、すでにのべてきたように、現代資本主義の蓄積様式は、他方で資本としての企業の側からの市場経済の政治化に促され、それに対立してくるように、労働の側からの政治化をはじめさまざまな地点から、資本の論理への意義申し立ての機会と条件を形成しないではおられなくなっている。したがって、わたくしたちは、たとえば、商品の使用価値を越え、つまり、交換価値から距離を置いて、欲望を欲望として、また使用価値としての使用価値にも思いを寄せうる社会的背景のなかで生きざるをえない、優位な位置にも立ちうるようになってきているともいえる。市場経済の中に、周辺に、いわゆるNPOやボランティアの活動がたくましく族生してきているのも、その歴史的表れの一つといってよいだろう⁽³⁸⁾。ということは、市場経済のあり方もその未来に向って、市場経済の政治化とともに、揺らいできていることを表現しているのではなからうか。社会的諸矛盾を内在している存在としての現実を、厳粛な現実問題として考察し、その克服へ向わしめるのも、わたくしたちなのである。その途は険しいに違いない。

あとがき

「まえがき」の冒頭でも紹介してきたが、「生産力は世界的に見て過剰状態にある」⁽³⁹⁾、この現実が現代資本主義の「根本問題」であるとおさえる高橋氏は、現代社会に起きてきているさまざまな深刻な諸問題を打開していくためには、いかにすればよいか、それらのことを、著書『市場経済システムを超えて』⁽⁴⁰⁾で具体的に提案されている。どこでも醒めた眼で発言されている高橋氏が、またそこで、佐伯氏や見田氏からはおよそ感じられなかった映像でもみるような、独自でシニカルな文体をとって、つぎように述べておられるところがある。

「幸せな暮らしを求めて」というスローガンの持つ響きはまことに穏やかなものだが、その実現が経済秩序の改善 (reform) すなわち重大な制度的構造的欠陥の是正と一体のものであるということになれば、改善は革命ほどには騒乱的ではないが、たんなる部分的な手直しとしての改良 (improvement) よりはドラスティックなものとならざるを得ない場合がある。」⁽⁴¹⁾

高橋氏のリアルな提案についての賛否にはいろいろあるに違いないと思っているが、その具体的内容をめぐっては、直接、その著書を読んでいただくとしても、氏がうえで述べられているように、市場システムを超えていくための現実とは、決して容易なことではない。しかし、見田氏の主張のうちに込められてあったような、自分自身の「欲望と感受の能力」の「転回」を求めて、この社会に発生している諸問題克服に現実的に取り組んでいかないかぎり、現代社会の未来がみえてこないのも現実である。

ちなみに、「市場経済システム」を超えていくための高橋氏の提案も、その思想も、佐伯氏や見田氏の所説と同じよう、やはり現代資本主義の市場経済の政治化という現代ゆえに形成されてきた産物であるといえよう。

(2002年8月8日、記)

注

- (1) 高橋洋児『市場経済システムを超えて --- 現代日本人のための「世直し原論」---』、中央公論社、1996年、119ページ。
- (2) ジャン・ボードリアール『消費社会の神話と構造』、今村仁司・塚原史、共訳、紀伊国屋書店、1995年。
- (3) 見田宗介『現代社会の理論 --- 情報化・消費化社会の現在と未来 ---』、岩波書店、1996年、iiページ。
- (4) キャサリン・A・マッキノン『フェミニズムと表現の自由』、奥田暁子・加藤春恵子・鈴木みどり・山崎美佳子、共訳、明石書店、1993年。
- (5) ジャン・A・ボードリアール、前掲書、186～187ページ。
- (6) 佐伯啓思『「欲望」と資本主義』、講談社、1993年。
- (7) 見田宗介、前掲書。

- (8) 佐伯啓思, 前掲書, 7 ページ.
- (9) 佐伯啓思, 前掲書, 177 ~ 178 ページ.
- (10) 佐伯啓思, 前掲書, 179 ページ.
- (11) 佐伯啓思, 前掲書, 179 ページ.
- (12) 佐伯啓思, 前掲書, 208 ページ.
- (13) 佐伯啓思, 前掲書, 208 ページ.
- (14) 佐伯啓思, 前掲書, 218 ページ.
- (15) 佐伯啓思, 前掲書, 218 ページ.
- (16) 佐伯啓思, 前掲書, 218 ~ 219 ページ.
- (17) 佐伯啓思, 前掲書, 72 ページ.
- (18) 佐伯啓思, 前掲書, 94 ページ.
- (19) 佐伯啓思, 前掲書, 95 ページ.
- (20) 佐伯啓思, 前掲書, 95 ページ.
- (21) 佐伯啓思, 前掲書, 95 ページ.
- (22) 佐伯啓思, 前掲書, 73 ページ.
- (23) 高橋洋児・石塚良次 『2001年の事始め --- 経済成長主義の臨界点 ---』, 実践社, 1999年, 229 ページ.
- (24) 高橋洋児・石塚良次, 前掲書, 230 ページ.
- (25) 佐伯啓思, 前掲書, 72 ページ.
- (26) 佐伯啓思, 前掲書, 73 ページ.
- (27) 佐伯啓思, 前掲書, 181 ページ.
- (28) 佐伯啓思, 前掲書, 218 ページ.
- (29) 見田宗介, 前掲書, 30 ~ 31 ページ.
- (30) 見田宗介, 前掲書, 169 ページ.
- (31) 見田宗介, 前掲書, 169 ~ 170 ページ.
- (32) 見田宗介, 前掲書, 170 ページ.
- (33) 見田宗介, 前掲書, 170 ページ.
- (34) 見田宗介, 前掲書, 170 ~ 171 ページ.
- (35) 高橋洋児・石塚良次, 前掲書, 242 ~ 243 ページ.
- (36) 見田宗介, 前掲書, 31 ページ.
- (37) 見田宗介, 前掲書, 31 ページ.
- (38) 鹿児島経済大学総合研究所編 『ボランティア・エコノミーと地域形成』 (日本経済評論社, 1998年) の馬頭忠治氏の論稿を, また, 氏の他の諸論文を参照されたい.
- (39) 高橋洋児, 前掲書, 108 ページ.
- (40) 高橋洋児, 前掲書.
- (41) 高橋洋児, 前掲書, 206 ページ.